

# 賈植芳先生のこと

小林二男

賈植芳先生にはじめてお会いしたのは上海復旦大学に留学生として滞在していた一九八一年の確か早春、上海復旦大学の中文系資料室に於いてであった。そのころ、先生は「胡風事件」の中心人物の一人としての冤罪が晴れ、正式に名誉回復がなったばかりであった。「胡風事件」とは、一九五五年中国共産党の文芸政策に批判的であった胡風（1902-1985）の文芸思想に対してブルジョア的であるとして展開された大批判運動が胡風の文芸思想に対する批判から「胡風反革命集団」の糾弾へとエスカレートし、これに連座し逮捕されたもの九二名、隔離審査六二名、停職六三名、事件に巻き込まれたもの二一〇〇余名という文芸界における建国後最大の冤罪事件である。中華人民共和国成立の翌年一九五〇年上海震旦大学（復旦大学の前身）教授になった先生は、三〇年代から胡風と親交があったため五五年五月一五日「胡風反革命集団」の中心分子の一人として逮捕され、六六年三月まで

拘禁されたあと懲役二二年の判決を受け出獄、以後二二年間復旦大学で「革命的群衆」の監視付きで「労働改造」、七八年九月以降復旦大学中文系資料室で仕事をできるようになり、八〇年一二月六五歳でようやく名誉回復、復旦大学教授の職に復帰されていたのだった。

話の内容は今ではもう忘れてしまったが、先生はその時人形帽をかぶり、堆く本が積まれた机に突っ張るように足を掛けタバコを手にし屈託なく豪快に笑いながら話をしてくれたのを覚えている。「胡風反革命集団」の中心分子として二三年間獄中生活・監視労働を送ったということから浮かぶイメージからは程遠く、長年の獄中生活・監視労働に疲れたというような様子は少しもなく、どこにでもいる話し好き・冗談好きの好々爺といった感じだった。

その後、上海に行く機会があれば、必ずお会いしていたが、一九九五年から九六年にかけて、在外研究で上海に滞在中は、先生のお宅にしばしば伺うことができた。先生ご

夫妻は中国の名酒「汾酒」の産地・山西のお生まれで、よく酒もご馳走になった。先生は一九一五年生まれ、八〇歳を越えるのでできるだけ昼間何っていたが、ほとんど毎回先客がいるか、あるいは私の後から誰かが訪ねてきていた。誰かが訪ねて来ると、奥さんがすぐに熱いお茶を出してくれ、先生は煙草を勧めてくれる。話しが長くなれば、お二人で食事をしていけと引き留める。訪ねる人のほとんどが先生の教え子、教え子の教え子あるいはその知り合いなど、みな先生を慕う人たちで、集まると談論風発、先生もその輪に加わり、書齋は知的サロンといったふうになる。先生と教え子の関係は、「教師」と「学生」というより、深い信頼・愛情・尊敬で結ばれている慈父と息子・娘、孫・孫娘たちといった感じである。先生は冗談を言うのがお好きで、長年の獄中生活・監視労働のことに話しが及んでも、「あの頃自分を批判したものは大方死んでしまっているが、お陰様で、むかし労働改造で体を鍛えさせてもらったので、こっちは長生きだよ」というように、話の終わりにほくほくと皮肉のきいた落ちをつけ、すべてを笑い飛ばす。何かについて具体的な教えを請うよりも何よりも、側にいるだけで何か大きなものを得たように満たされた気持ちにさせてくれる。先生が獄に繋がれたのは「胡風事件」の時ばかりではない。簡単に経歴をたどると、先生は一九一五年山西の生まれ、一九三五年北京で「12・9」運動に参加して、「共産党の嫌疑」で逮捕され二ヶ月余りの拘禁。三六年春出獄後日本に渡り日本大学社会学部で学び、中国人

留学生を中心とした左翼文学運動に参加するが日中戦争勃発で帰国。帰国後抗日運動に参加し、一九四五年五月徐州で日本支配下の警察局特高科に逮捕されて三ヶ月の拘禁、日本敗戦の翌日出獄。一九四七年九月上海で国民党特務に逮捕され四八年一〇月まで一年一ヶ月の拘禁。「胡風事件」以前に三度入獄している。四度も入獄し、一三年間も監禁され労役に服した人。人生の最も仕事のできる時期を奪われた人。先生は一〇年近く前、こう語ったことがある。

「私はこの世界で七十数年生きて、もうまもなく火葬場に行こうとしているが、自分で慰めのできるのは、神様が私に準備してくれたでこぼこの人生の道で、私はどうにか人間らしく生きたといえるということである。生命の歷程は、私について言えば、自分の生き方と人としての品格をつくる過程でもあった。私の生涯の最大の収穫は、ほかでもなく「人」という字を比較的きちんとかいたことである。」  
〔且説自我自己〕『収穫』一九八九年第四期

四度の入獄にもかかわらず、先生は自分の信念を貫き、自分に対しても他人に対しても嘘を言わず裏切らず、友情を大切にし自分の信念を貫いてこられた。先生という「人」が多くの人を引きつけるのだと思う。

先生は現在復旦大学で博士課程の学生の指導にあたられるほか、中国比較文学学会名誉会長、中国現代文学研究会顧問、中華文学史料学会会長、上海比較文学学会会長などを務め、すこぶるお元氣である。なめ尽くした苦しみ・悲しみを包み込んで外に出さないあの笑顔が懐かしい。上海に行ったら、またお会いしたい。